

「子どもの保健Ⅱ」授業改善に向けてのレポート

渡辺 朱実

A Report toward improvement of teaching “Child Health Ⅱ”

Akemi WATANABE

はじめに

一昔前は兄弟も多く、兄姉が下の子の面倒をみたり、近所の子とも同士年齢に関係なく、外で遊ぶ機会も多かったため、自然に小さな子と関わることも覚えてきた。抱っこしたり、オムツを替えたりすることも親の手伝いをすることで体得することもあっただろう。現在では、一組の夫婦が育てる子どもの数が1人から2人で、兄弟のいない俗にいう一人っ子が増えている。外で遊ぶ機会も少なく、同級生同士少人数で家の中でゲームをしたり、と遊び自体も変化している。小さな子どもとの関わり方の経験もないまま大人になっている。視点を変えて、女性の側からみると、出産後、子どもを保育所に預け仕事をする家庭が増え、保育所が足りず待機児童が多くいる現状にある。厚生労働省作成の『保育指針解説』では「保育の内容の改善」として発達過程の把握による子どもの理解、保育の実施、そして

- ① 「養護と教育の一体的な実施」という保育所保育の特性の明確化
- ② 健康・安全のための体制充実
- ③ 小学校との連携

と掲載されている。誕生から就学までの長期的視野をもって子どもを理解すること、子どもの健康・安全の確保が子どもの保育所での生活の基本であるとの考えの下に子どもの発育・発達状態の把握、健康増進、感染症など疾病への対応、健康管理、安全管理などの諸点に関し、保育所が施設長の責任の下に取り組むべき事項を明記されている。加えて不適切な養護に関する早期把握、要保護児童対策地域協議会など地域の専門機関との連携とも書かれており、保育士の業務の専門

性と知識の深さが要求されている。(上掲書)

実際、保育士に求められるものは多くあるが、現在保育士養成校において、小さな子どもを知らずに育っている学生が大半で、そうした中で学生に演習で、体験してもらうことはとても重要なことであると考え。

保育士は業務の中では子どもの命を預かり緊急の判断を必要とする場合もあるため、ある程度の医学的知識も必要になる。筆者が担当する「子どもの保健Ⅱ」(演習)は、子どもの健康に焦点を当てた関わり方を理解し、実際の保育場面で役に立つような具体的・実践的な知識・技術を習得させることが目的となる。

本レポートは、この「子どもの保健Ⅱ」の授業改善のため、平成25年度前期の授業内容をまとめ、今後の課題を見出すことを目的としたものである。

1. 授業のテーマとその内容

「子どもの保健Ⅱ」(演習、半期、1単位)は保育士資格取得のために必要な必修科目であり、「子どもの保健Ⅰ」(講義、通年、4単位)と連動している。1年次に後者を学んだ後その基盤の上に、保育現場で子どもの保健に関わり実践できるよう、具体的実践的に学ぶ科目である。

平成22年に保育士養成カリキュラムが改正されたが、それに先立ち「中間まとめ」において各科目の目標・内容が示された。その内子どもの保健Ⅱ(本学における「子どもの保健Ⅱ」)の目標は以下の通りである。

1. 子どもの健康及び安全に係る保健活動の計画及び評価について学ぶ。
2. 子どもの健康増進及び心身の発育・発達を促す

保健活動や環境を考える。

3. 子どもの疾病とその予防及び適切な対応について具体的に学ぶ。

4. 救急時の対応や事故防止、安全管理について具体的に学ぶ。

5. 現代社会における心の健康問題や地域保健活動等について理解する。

以上を踏まえ、授業の内容は、次のように計画した。

◆第1回 健康状態の観察

＜一般状態の観察について＞

○体温、脈拍、呼吸の観察と測定 → 正常と異常を知る。

○機嫌を観察することの重要性

○乳児の泣き方の違い

○睡眠、食事、活動、排泄 → その子の普段の健康状態を把握しておくこと。

＜演習＞

学生自身が自分の脈を測定する。

体温の測定 — 測定部位、体温計の挿入の仕方

脈拍の測定 — 脈拍測定の仕方、測定できる部位を知る。

演習で実際に測定部位を確認する。

呼吸の測定 — 呼吸数測定の方法

◆第2回 身体の発育について ～計測と評価～

発達と発育の意味

発達の分類 → ・胎生期・新生児期・乳児期・幼児期・学童期

身体の発達 → 身長、体重、胸囲、頭囲

評価 → ・パーセンタイルの説明・カウプ指数の計算・発達のしかたにおける正常と異常の考え方

臓器の発達 → ・胎便、生理的黄疸について・口腔内、胃腸、循環器
生殖器の発達

＜演習＞

○人形を用いて実際に身長、体重、胸囲、頭囲を測定する（講義の中で測定時の注意と実際の乳幼児の違いを説明する）

◆第3回 発育の正常と異常

原始反射 → 探索反射・吸啜反射・把握反射・バビンスキー反射（足底反射）・モロー反射・緊張性頸反射・引き起こし反射

○それぞれの反射の説明と消失時期

○脳性麻痺について（原始反射とのかかわりが深いためこの時間に講義を行う。） → ・症状と発見、治療・脳性麻痺の合併症（てんかん、精神発達 遅滞）について

◆第4回 運動機能の発達と順序

第1回～第3回までの復習として小テストを行う。

運動機能の発達 → 定頸（首の坐り）・寝返り・お座り・ハイハイ・つかまり立ちから一人歩き

○それぞれの発達の時期 → 正常と異常

精神機能の発達 → 言葉の発達・2～3歳の反抗期

◆第5回 沐浴 ～実習～

小テストの講評

沐浴の目的、準備、手順の説明

＜演習＞

○学生2人一組で演習を行う。^{※注}時間の関係で全員行うことはできなかった。

○沐浴人形、ベビーバスを使い、手順通り実際に沐浴を演習する。一人が沐浴させ、もう一人が評価し、演習後講評する。

◆第6回 衣類、オムツについて

衣生活について → ・衣生活の目的・季節、月齢に応じた着せ方の目安

オムツについて → ・布オムツと紙オムツの長所と短所・オムツの当て方（注意点を含めて講義）

靴、靴下、帽子の着用について季節に応じた着せ方の変化

＜演習＞

○沐浴前の衣類の準備の仕方

○人形を使って新生児、乳児への衣類の着脱を演習する。

◆第7回 健康管理 ～個人と集団～

保育園など、集団に対する管理

室内→保育室（椅子、テーブル、玩具）・調理室・トイレ、洗面所

屋外遊具→砂場、水遊び用プール、足洗い場等

個人に対しての健康管理→・睡眠、食事、排泄、着脱など健康管理における保育園、幼稚園の役割

〈演習〉

・1学年時の実習の経験から、保育園で行われていた集団（園児）に対する健康管理についてグループワークを行い、結果を発表する。

◆第8回 疾病予防と感染症について

第4回～第7回までの復習としての小テスト

感染の種類→・空気感染、飛沫感染、接触感染

感染症と伝染病→・麻疹、風疹、水痘、流行性耳下腺炎、インフルエンザ、ノロウイルス、手足口病、伝染性紅斑、流行性角結膜炎等

疾病予防→・乳幼児の保健指導と親および保育者の知識の向上

・健康診断→乳幼児および職員に対して行われる

・予防接種

・施設的环境衛生

保育園、幼稚園で感染が拡大しないようにする対策

〈演習〉

学生全員が手洗いの演習を行う。（汚染部位が見える機器を使用し、手洗い前後の比較をする。）

◆第9回 予防接種、関連する法律

予防接種の種類→・生ワクチン・不活化ワクチン

予防接種法の理解→・勧奨接種・任意接種

学校保健法→・小児期に多い飛沫感染（第2種）・登校（園）許可書

歯の萌出と虫歯（う蝕症について）

◆第10回 安全教育と事故防止

職場内での事故防止対策→・リスクマネジメント

・ヒヤリハット アクシデントレポート

安全教育→・体験に基づき、痛さ、熱さを知る。

・危険なもの（ハサミ、ナイフ等）は年齢に応じて教育していく

交通安全教育

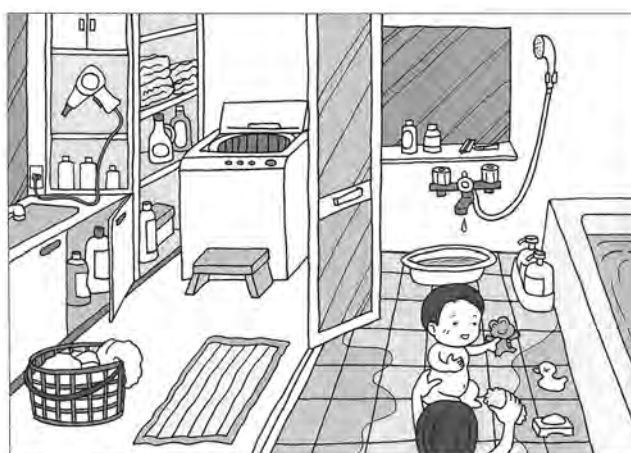
〈演習〉

事故防止→・教科書を参照して事故防止について学ぶ。

・グループでイラストを見ながら危険か所を見つけ、どうしたらよいか対策まで討議する。参考資料（1）



4) 例1(居間)



5) 例2(洗面所・浴室)



6) 例 3(台所)



10) 例 4(公園)

- ◆第11回 行政による母子保健について
 - 母子保健行政の歴史→・教科書を見ながら、時代背景とともに妊産婦への関わり方の変化を知る
 - 千葉市の現状(行政側からの目線)
 - 妊娠届および母子手帳交付
 - ・過去と現在の比較(交付時に行う事)
 - ・行政として問題点を把握し、保健指導を行う。
 - 些細なことでも相談を受ける
 - 健診について→・4か月、1歳6か月、3歳児健診
 - 〈演習〉
 - 新生児、乳児の抱き方おおい方の違いについて

- ◆第12回 よくある子どもの病気と養護
 - 緊急性のある病気→・脱水・呼吸困難（気管内異物・誤嚥）・熱中症
 - ・腸重積・けいれん・小児の糖尿病（低血糖）
 - ・アレルギー（アナフィラキシーショック）
 - ↓
 - 上記疾病の主な原因、症状、治療について

意識レベルの見かた→3-3-9度方式の説明

- ◆第13回 保育における応急処置とその方法（薬の与え方など）
- 第9回～第12回の復習として小テスト

- 罨法→・湯たんぽ・氷枕・氷のう（作り方、使い方、応用の仕方）
 - ・罨法を使用する部位
- 薬の与え方→・保育園、幼稚園での対応
 - ・服用時間→食前、食後、食間、時間薬、就寝前
 - ・オブラート、ジェルの使用
- 浣腸→・綿棒、こよりの使用について
- 〈演習〉
- 学生が実際に湯たんぽ、氷枕を準備する。
- オブラート、ジェルに触れる

- ◆第14回 保育における応急処置とその方法
 - 小テストの講評
 - 応急処置→・発熱、腹痛、下痢、嘔吐時の対応・小さなけが、熱傷の処置・止血の方法・骨折時の応急処置
 - 〈演習〉
 - 止血場所の確認
 - 骨折を疑われる場合の対応
 - 三角巾を使用して上肢の固定法

- ◆第15回 保健計画書の作成について
 - 保健計画書とは
 - 保健計画書の作成方法
 - 保健計画書の活用

2. 授業のすすめ方の方針

第一に、具体的・実践的に知るという科目の目的達成のため、なるべく毎回実習（演習）の時間を取り（30分程度）、そのために必要な知識また背景となる知識を講義によって教授する。

第二に、この科目は、一年次の「子どもの保健Ⅰ」の学習が前提となっているため、その知識・理解の確認をしながら進める。

第三に、数回の授業ごとに1回の小テストを行い、学生自身が授業の内容を再度理解してもらうことをねらった。

第四に、授業の進め方や演習が授業者の独りよがりにならないように、学生に対してアンケートを実施し、学生の立場からの評価の基準にしたいと考えた。また、今後の授業に学生の考えを反映したいと考えた。

3. 授業を実施して

3-1 授業について

授業の中で1年次の復習をしながらすすめた。授業の中では現場での出来事、実際経験したことを含めて講義を行った。教科書を読んで説明するのみでは理解しにくいことも、経験に基づく話には興味を持って聞いていたように思う。特に第8回の授業（集団における健康管理）の中で、1年次の実習で経験したことを思い出しながらグループワークを行ったが、学生自身が身をもって経験したことはリアルに思い出せるものであったと考える。

学生アンケート

- 「授業の進み方が早い。」
- 「早口で理解できない。」
- 「医学用語が多く出てきてわかりにくい。」
- 「看護師になるわけではないので、医学用語は覚えなくてもいいのではないか。」等の意見があった。

3-2 小テスト

15回の授業の中で3回の小テストを実施した。小テストはあくまでも復習の目的として行い、採点も教科書やノートを確認しながら学生自身が行った。授業中にを行ったためテストは15分採点15分とした。

小テストをする旨を学生に話すと、最初は反発もあったが、復習として行うこと、評価に反映させないことを説明すると理解を示していた。

学生アンケート

- 「小テストをしたことで、良い復習の機会になった。」
- 「採点を自分で行ったことで、振り返りができた。」
- 「理解が深まった。」等の意見があった。

3-3 演習について

演習は健康状態の観察の授業では、自分の脈を測る。身体測定では人形を使って身長、体重、頭囲、胸囲を測定したりした。

感染予防について、手洗いが重要であることはわかっても、どうやって手を洗ったらきれいになるのかが理解しにくいため、汚れが見える器具を使用して実際全員に手洗いをしてもらった。

沐浴の演習では、全員が演習する時間がなかったため、1時限中2人1組で演習する側と評価する側に分かれ、8組16名が演習した。その他の学生は周囲から見守る形をとった。

その他、応急処置として、三角巾の使い方、骨折と思われる時の対応、一人で抱えられない子どもや大人を移送する方法など実際に学生に指導しながら演習した。

学生アンケート

- 「沐浴の実習は全員が行えたらよかった。」
- 「実習をする人が決まっていたようにおもう。」
- 「手洗いは、実際に汚れが見えてよく解った。」
- 「なかなか汚れが落ちなかったので、手洗いの難しさが解った。」など、演習を行う事で理解を深められたようだった。

4. 考察

4-1 授業について

1学年時の授業を基に、復習を交えながら演習をすることで実際の仕事の現場に役立たせることが、子どもの保健Ⅱ（演習）に必要なことだと考え授業をおこなった。

保育所の看護師として保育士と仕事はしていても、保育士になる学生に指導することは初めてなので、最初は戸惑い、学生に圧倒されることもあり、授業の進め方や方法も手探りだったように思う。だが、授業の中に演習の時間を少しでも取り入れたことは学生が深く理解するよい方法であったことは学生のアンケートからも読み取れることだと考えた。

今後の指導として、演習に重きをおいた授業展開ができるような構成を考えたいと思う。

細かいところを言えば、授業の内容から医学用語も当然必要になる。が、学生は保育士になることを目的としており医学用語の必要性は感じていない。知っていなければならない言葉もあるが、私自身どこまで医学用語が必要で、どこまで指導したらよいのか迷うところであった。医学用語を覚えることに時間をかけるよりは、授業の進め方をゆっくりしたり、学生が理解出来るように複数回解説する事などの方が重要なのではないかと考え、今後の課題として残る。

4-2 小テストについて

復習の目的とはいえ小テストを行う事は学生には知らせず、数回に1回の割で抜き打ちの形をとった。

学生の反応は拒否的なものであったが、小テストの点数は評価に含めないことで納得した。

採点を自分で行う事は、教科書開き考える必要があり、よりよい復習の機会になると考え実行したものであったが、私が考えた以上の効果があったように思う。

アンケートの結果からも授業では聞き逃し、流れてしまったことも教科書を読んで振り返ることができ、また評価の対象にならない気安さから受け入れられたのではないかと考える。

4-3 演習について

先に述べたように、授業の中に演習を取り入れることは理解を深めるよい時間になったようだ。

演習そのものは自分で自分の脈を探ったり、学生同士で抱えて移送したりする小さな演習から、沐浴をする、着替えをさせるなど人形を使って行う時間のかかるものまでさまざまであった。

演習中の学生の様子を見ていると、「半分遊びか！」

ともとれる反応をする場面もあったため、この演習は失敗だったかと思えた。が、学生のアンケートを見ると、「全員が沐浴の実習をしたかった。」「自分も演習できるメンバーに当たりたかった。」など積極的な反応が返ってきていた。

この結果から、指導者側から見る反応と実際演習する学生の考えでは違いがあることが解った。

今後の演習についても今年度の演習と同様に授業の中に取り入れて行っていきたいと考える。学生それぞれが納得できる演習の方法を探っていきたいと考える。

おわりに

看護職としての経験はあるが、保育士になる学生を指導した経験はなく、学生にどのように指導したら理解してもらえるのか、またどこまで説明するべきか迷い、戸惑った。が、子どもの保健Ⅱ（演習）という教科の特色を生かし、演習の時間を多く取り入れたことで学生はリアルに理解できているように思った。

今後、演習の形態をどのようにしていくか、演習そのものの内容や時間配分など課題は残されているが、医療の分野から、学生により深く理解できて実践に役立つような授業をしていきたいと考えている。

今回の授業、論文作成にあたりご指導いただいた大沼教授、荒武典子先生をはじめ、ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

参考引用文献

保育指針解説書 厚生労働省

白野幸子 『子どもの保健Ⅱ（演習）』 医歯薬出版株式会社、2012年

小林美由紀 『子どもの保健演習ノート』 診断と治療社、110頁、111頁 2012年

鴨下重彦・柳澤正義監修 『子どもの病気の地図帳』 講談社、2007年